

205266-000-4

41-93

筑波子家集

[出版事項不明]

EDV-0327



つくば子、又しげい子どもいへりき、つくば山しげ山といへる古歌の
詞によりて、かよはしおほせたる名あるべし、進藤正幹ぬしのやしあ
ひ子にて、土岐頼意ぬしの妻なり、縣居の翁に物まなびて、歌よむわざ
をよくせり、かぎりなくくれどもおなじとよめる初春の歌に評せら
れて、天曆のころの女房のくちつきとおぼゆなど、翁もはめきこえら
れたりけり、こゝにねのれ、近きころ、この刀自の歌の一卷見出たるが
こゝ皆翁の點わはせられたるかぎりをえりて、みづからの筆して書
おけるになむありける、めづらしくおぼえて、一わたり見およぼすに、
年ひさしくかたみの底におし入れたるまゝと見えて、字ども虫はみ、
紙なぞすゝけにたれば、所々よみとりがたきも少からぬを、おもひよ
るまゝに、ひとつふたつかきよめて、かくうつしを、ぬきを、やがて
板にゑらせたるなり、いでや此刀自の名にしおほし、しげき言の葉數
つもりたりけむを、つくばねおるし、いかさまにさるひいにてか、この

○筑波子家集序

もかのもにちりはひうせけむなは朽殘れるもあらば、すきく〜にひ
ろひあつめぬべしかし、今かきあつめしかぎりは、みじか歌もよとい
ひて、あまれる數むそぢまり八歌、長歌ふたうた、ことばは、たゞひとつ
のみなむ、

文化九年四月

清水濱臣

つくば子家集

春部

年のうちに春たちける日
 わらたまのとしのこなたに春くれば雪もちりつゝ梅もさきけり
 冬ふかき水もぬるみてうずらひのとくるころに春ぞくまると
 しはすうるひなりける年の暮に春立けるに雨のふりければ
 一どせはなほのこれどもふる雨のうるふたよりに春やきつらむ
 むつき
 かぎりなくくれどもおきて春なればわかぬ心もかほらざりけり
 なにとなく心ぞ春になりけるかすみもあへぬそらを見つゝも
 花といふ花のさくべき春なればにはぬほをもめづらしきかな
 うらく〜と春し來ぬればうぐひすの聲もまたでず聞そめにける
 足びきの山へにおふるまよささづらくれども春はつさせざりけり

○筑波子家集

筑波子家集
つくばこけいしゅう
二冊

かつしかの野への霞にたちまじりわかきつむべき春は來にけり
見わたせば霞のころもよろひつと今朝めづらしき春は來にけり
うらくとをかすみろめけりこのねぬる朝けの空に春やたつらむ
霞たち梅のかをいもまさりゆくむつきのぞらうれしかりける
さはひめの手染の糸のうちばへてくれどもつきぬ春にもある哉
元日子日なりければ

むつきたつ今日さへ松をひきつれば心ゆくべき春に予ありける
殘雪を

花もやうにはははむとおもふ山里におぼつかなくものこる雪かな
若菜

春日野にのむや若菜はしとせのころすさびのはじめありけり
しるしらぬ共につめども春の野にねふる若菜はつきせざりけり
人のもとへ若菜やるとて

のめと猶つきせぬものは野へにおふるわかきを君が齡なりけり

梅を見て

春たちてにはへる花の顔見ればわれさへどもにはとあまれけり
梅を見る辭かけるおくに

もろどもにはなにもつるさ驚はおもふとちとすいふべかりける
鶯

今朝よりはつぎてとはあむ我宿のあさしぬ原にきなくうぐひす
世の中のうきさつちさもうぐひすの聲をしきけば忘れにけり
一 歌合に梅の花のちりすぎたる後に鶯のなくをきよて

山ざとは人目かれゆくこのころの春をさへとふうぐひすのこゑ
ささらぎ

ささらぎの空にしなれば一年のかくてあれなどおもほゆるかな
かすが野の霞もいまだわかなくに春はなかばにありにけらしも
花を見て

春がすみたちろめしよりいつしかと空にまたれし花もささけり

花のころ山路をすやとて

なほざりにうちすぎぬべきかけもなくにはひあらそふ山櫻かな

家の花さかりなるころ

とはれなばやさしかるべき宿なれを花しにはへば人ぞまたるゝ

山里へ花見にゆきて

山はみな花のすみかどありはてゝもど見し庵をたどられにける

櫻山吹なせにしきのやうなる枝をものきよらなる池の底にうつ

りぬるはたうちむかへるよりもこよなうをかしうて

わたつみのかしこき浪もいたづかでたつの都のはるを見るかな

石清水臨時の祭

花をしも見つゝこゆればをどこ山よにねぎこどもあらぬ今日哉

三月松に藤のかゝれる所

よどどもに變らぬ松のさゝろにはあへなく浪のこゆるとや見む

藤を

たちかへり見れども岸の藤なみはよせくるたびに袖をぬらさぬ

夏部

おうざくら

あどてかく春にもあはで山陰に木ぶくれてのみひとりさくらむ

のこのりのさくら

こゝろして風もふかなむ春だにもさそはですぎしみ山ざくらず

はととぎす

さみだれのなぶめまされる夕暮にうたてもなくか山ほととぎす

卯花の咲そめしよりほととぎすちぎらぬものまたれこそすれ

ほととぎすなくやさつきの橋の花ちるころのあかおもあるかな

さつきのころしも鶯のねのさらがへりてめづらしくおぼゆるに

ほととぎすのおのがをりしりがほになきわたるをきいて

うぐひすに聲うちそへて春夏をかたらひかはすほととぎすかな

さらへりて
更に元立返
る意

さつきいつかの日れもひにこもりて

墨染のやみにこもれるわが宿はあやめも知らぬねぞなけれける

菅原ぬしの家にさつきむゆかの日人々どともにうたげして

もろともにあうふありけり物の音に聲うちうふる山はととぎす

村田ぬしのなり所に人々どともにかかりて

思ふ事なくてし暮す今日のみはほどとぎすさへまたれざらなむ

五月道ゆく人はととぎすをさく

おくれずもゆかましものを郭公いつちのうらになきてすぎけむ

ゆふがは

中垣のあらはなりしも夏くればはひもてかくすゆふがはのはな

さゆり

あつさにはみだれながらもえならずよにはふさむりの花の姿の

ゆふがはの苗を人のがりやるとて

ゆふがはの花見る時につゆふかさあさぢが庭もおもひいでなむ

夏

夏の夜のほたるや何すあけゆかは露よりさきに消えむとすらむ

浦風にはたるみだるまわしのやの里はよるころとふんかかりけれ

六月海のはとりにすいみする所

見わたせばすいしかりけり浦風にゆくへをまかすあまのつり舟

風そよや浦のあしべのすいしさにいかでか浪のたちかへるらむ

みなつき

風をのみしたしき友とたのみつとあやさく暮すみあつきのうら

わくらはにすいしき風もかよはあむさばかり遠き秋ならなくに

秋部

秋たちけるにおもひにこもりて

よもすがらいとを物をやおもはまし虫のねわぶる秋は來にけり

あけさつと暮せるものを物おもふ秋さへ今日はたちけるかな

赤ぬかの夜

天の河わたり渡らずよもすがらおぼつかなくぞ音がめられける
あまの河かはせすいしき夕月もよそに見つとやこぎわたるらむ
あふせなき中だにあるをあまの河年のねたりとかこたざらなむ
かぎりなきあまつみうらの棚機の中さへ名にはたちけるかな
あした
たちかへりかたみに物やおもふらむ昨日わたりしあまの河なみ

秋風

わがせこがとさあらひ衣もぬはなぐに萩の葉そよぎ秋風のふく
秋かせはしなく野べの萩が花ちゆゆくころ身にはしみける

虫

秋の夜はねられざりけりあはれともうしども虫の聲をきつと
秋の野にあるびしつとめて人のもとへ花をもおくるとて
ひとり見む千ぐさの花をあたらしみ心なげにもあまたたをりつ

漢臣云此歌よ
の子の歌なり
といふ人あり
と自ら筆し
て書ける此集
に入れたるは
子にけりあら
すなりけり

八月十五日夜

はしむしてこよひの月の影見ればおもなきまで予照わたりける
一とせに一夜のみ見る月なればひたすらにこそむかはれにけれ
照わたる月をし見ればこゝろさへいたりいたらぬうみ山もなし
秋毎におもまれにける月といへといつもうひなるこゝろこそすれ
秋の夜に予物はおもほゆるいたくもうらのはれずあらあむ
秋のもあかの月よもすがらいたうくもりければ
見る人と月とのなかをへだてつとこゝろなやます雲にもあるかな
いかなる時にかありけむ月を見て
ともすれば月見る空のくもりつとおぼつかなくもぬる、袖かな

萩

なにとなく鹿のねさへ予おもほゆるまがきの萩の花のさかりは

秋夜

このころのよるはきぬたの音すなり雁の聲はたうちろはりつと

おしなきまで
そ面みなさま
でななり

おもなれにけ
る見馴れたる
なり人の古今
上り何の世か
露はかたも見
なしほかにけ
顔の花にける
朝

雁

ながめつゝすいろに物をおもふかな雁さきわたる夕ぐれのそら
ゆふぐれの霧のまよひになく雁のあやなく誰をどひわたるらむ
衣うつ

露霜のおくらむものをあさぢ原あかつきかけてころもうつこゑ
秋の末つかた友だちつとひて紅葉の宴すときくにゆかむことの
えまかせぬをかこちて

いたづらに袖のみぬるゝ時雨かな山べはさこそもみぢしつらめ
まささのかつらのもみぢしけるを見て
ともすれば下もみぢするまささづら秋さきものゝ秋を見せける

冬部

冬のはじめの歌とて

しぐれつゝあさぢいろづく鴉鳥のかつしか野べに冬は來にけり

氷のむすびはじめたるあした

紐かどみ結びろめぬる今朝よりは朝いせでこそ見るべかりけれ

もみぢ残り

もみぢ葉はともしくなれど神無月しぐるゝ頭を見るべかりける

神無月

みやこにはころもがへする神無月やまさど人やふゆをもちるらむ

おらし

つくばねの木の葉みなからふきみだりかしこきばかりたつ嵐哉

もみぢおつ

紅葉ちるふもとの里の山おつはからにしきをすゝらかづける

あかなくにもみぢ葉拾ふ木のもとは厭ふものから風をまたるゝ

しぐれ

今こそはふり來にけれおもふまにやがて時雨の音をたえぬる

冬人にわかる

わかれ路の空にうちゝる白雪のこゝろみだれてゆくへ知らずも

鶯

なにはがたあしまの床も霜がれてぬる夜なげあるをしの聲かな
火桶を手まさぐりにして

山がつのなげきこりにし炭あれば今もおもひずもえわたりける
うづみ火

とばかりもたち離るればたへやらでやがてよりうふ埋火のもと
雪

春ならであらしものとはおもへども空に花ころちりまがひけれ
ちりみだるみ雪は冬の常ながらおもひふるさむものとしもなし

戀部

知らぬ人

はのかにも見し人ならばおもひねに慰むゆめもあらましものを

年経ていふ

谷川の岩ねのうま木いつまでかうきてはかなきよをばすぐべき

はじめてあへる

おもひねの夢のすさびにならひ来て現ともなきこよひなりけり

あした

うつり香の残るばかりは夢ならで夢かどたどるよはのおもかけ

あひおもふ

年ふとも亂るゝことのおくもがなうらなくなれし君がころもに

うちきてあへる

笹わけじもすその露はさしながらまつにひぢぬる袖も見よかし

人をまつ

たが里の花たちばなかまさるらむほどゝぎすだにとはぬよひ哉

おもひいづ

ふるさとのつゝるの水に見し影のこひしきこに袖をぬれける

つゝも堀井な

契れるよしも人目しげくてえあはれぬに
 うらむらむ人の心すおもはゆるわが身にそはるうきにつけても
 おもひつゝいもねぬあかつきに
 つらかりし鐘も今こそ聞ゆなれあひ見しよはをしのびあかせば
 ねさめのこひ
 うたさねに見えつる夢ははかなくてつれなく残る人のおもかけ
 いのるこひ
 わびぬれば神のみまへにもらすなり人知れずのみ思ふこゝろを
 雨のふるに人をかへして
 ひどりのみぬるとや雨をかこつらむのこれる袖も露けきものを
 かれくゝなる男のもとへ
 ことかたにひとの心のかよへばや夢路にさへも見えずなりゆく
 まださしぐれのとうらみつればかへし
 思ひつゝぬる夜あければかよひてし夢路も今はたえやしぬらむ

あしやの里の
 うらむらむの
 萬葉集巻九に
 過祭屋敷女
 原作歌女見
 原歌女見
 語に見ゆ大和歌
 には作れぬり

いにしへのあしやの里のうらむらむをとめのはかなかりしことども
 を題にてかのみたりにありてよめるよばふ男よもすがら女の家
 の門にたちて
 われならぬ人にもつらき心といおもふものからなほうらむる
 又ひとりの男
 歎くとも戀ふとも知らで人はしもいかなるかたの夢か見るらむ
 身をあげむとする時女
 いづちをも思ひわかれぬ身の果はうたかた波をよるべに予する
 みまかりて後男
 今は身のうき鳥とこそありにけれきそはで共にみつべきものを
 女かへし
 水鳥のうきねの床をさだめかね音をのみなきしはてど知らなむ

雑部

天

雲

よと共に見つゝ暮せをさましくにあかぬは空のけしきなりけり

風を痛みすぎにすぎゆく浮雲のかさなるはてやいづこなるらむ

みやこ

のどかなる都のはどぞ知られぬるゆきかふひとの袖のさまにも

ひな

とにかくにいとなき業の多加れを心やすきはひなにすありける

たび

わがたもとうたても露にぬるゝ哉ひとやりあらぬ旅まくらして

くゞつ

はかなくもよきくかはる假枕ともたびねとおもひやはせぬ

あき人

わたらひの心ぼろさも知られけり糸うるしづのたえすくるには

くゞつ遊女

伊勢の海濱に伊
はまゆふの如に
多し芭蕉の皮の
重く幾重もな
り重れるもの

人のもとよりはまゆふねこせたりけるかへりことに

よる涙のおとほのみさくみくまの浦のはまゆふ今日見つる哉

家こぼちてあらたにつくりかふるに年をろのなごりのみかは昔

の事のいよゝ遠くさへなりもてゆくことちして

家は皆あらずなりてもなき人のおもかげのみすたちかへるべき

なれにけるまきの柱し残りせばわするなどだにかきつけてまし

ある人のもたる扇の繪に海邊に人やすらひてすゝみをるかたか

けるにこれに歌ひとつとありければ心も得ねど

ふくからにたちよる浦の浪あらですゝしき風にさそはれてけり

あらしわが身を

露のみはおきそはりつゝ葛の葉のうらみむ風よおとづれもなき

あはれとぞさく

よもすがらつがはぬをしの鳴まをひうたかた浪の床もさだめす

たぐひあらし

たちばなの花ちる里にながめして暮せるよひにさくほどとぎす
 二月ばかり旅にいにし人をおもひやりて
 よしといひし吉野の山の隈もおちすわけや見るらむあはれ此頃
 さぬきの國へゆきてある人のもとへ
 松が浦のさしたよるてふ白浪のまなくもひとのたちかへらさむ
 よの子をおくるふみのおくに
 こゝろをし君にたぐへてや立つればおもひのこせる海山もさ
 人のうせぬときとて
 あかすしもそめし紅葉をゆくりなくいつちか風の誘ひひにけむ
 せうろこしていはするやうはかなのよやいつもしぐれはとさこ
 ううちおがめおはさうすらめとおもひまゐるに、あへなくとばる
 れば
 里おがすしぐれやすらむ君と共にこゝにも袖はかわがさうけり
 空にもしぐるれば

おほかたの空にもあらであやにくにしぐれや人の袖ぬらすら
 いかさまにかとおもひやられて
 わたり川渡りばつやとおもふにもはかなく袖ぞひぢまさりける
 おひしれりける人のみまかれるをり
 とまる身も風まつほとの露の世とおもふものから人予かなじき
 なきは敷をふ世の中にあるが中にも、かつら子の刀自は、まさまづ
 ら長くたのみて思ひひつひつ、すぎにしまつりのころは、かなら
 ずあふひの名をもちぎりつるものをいたづらにすぐいたるこそ
 いかあいなうくやしけれ、墨染にやつる身にもあらぬすらやみにま
 せべるこゝちするを、ととあるじのなげかすらむほども、おもひ
 ろへられて、あさましううたてわれは
 あま雲のかゝらむともしもおもひせばあくまで月の顔は見むもの
 うちきらまふるやさ月の雨もまに山ほと、きすひどりきくらむ
 ものふのたもともいかにくちぬらむ雨も涙もさみだるゝころ

いたうふりておもしろき松を物にうゑて父君の朝夕かたへさら
すすゑおきていくよてふ名さへおほせてこと木よりもめでたま
ひつるを今たゞ松のみ残りければ

今はしも君にちぎりのたがへれば松もいくよのなげきとぞ見る
いとけなき子のうせしころ

結びつと見ろむるはせもあらなくにはかなく消えし草の上の露
亡魂のあるをこひしとおもひせば夢路にだにもたちかへらなむ
いわけなくいかなるさまにたどりてかしの山路を獨こゆらむ
をとこにおくれぬるころ

歎くとも戀ふとも知らでいかならむ方にのどけく君はすむらむ
見し夢のさめぬはせにしきえもせば今のうつゝに物はをもはじ
かくいふはせに雪のうちにれば
見るはせもあらずなりぬる雪ならで消殘るともおもひけるかな
人の六十の賀に

こゝら世をのどけく遊ぶ長濱のたづのうへしもたれならなくに

橋枝直ぬしの七十の賀の屏風に海に舟をうかべて月見る人あり

沖の洲崎に松多くたてり

いくう秋くまおきあみにてる月をかくて見るらひおきつ鳥もり

人の八十の賀に松契多年といふことを

いくそたびわかかへりてか君も見む友とみせりの松にあらひて

つゑのうた

いほへ山ちへ山ふかくもどめつゝされるしもとはやま人のつゑ

若菜にそへて人をいはふ

よろづ代の春を今よりまつものは野への若菜と君にすわりける

物名

かるかや

さそひゆく風ころたえぬ梅の花いかにおほかる香やもたるらむ

ものから 何しかもわれもきはひて なるらむ花のあしたも 月
 の夜もうれしきことも うきこともあるにつけては ともがきのべ
 だてざりつる ちからひはいかなるすぢか 玉かつらおもかげにの
 み たちうひてつきしもはてす したひつゝふるの中道 ちか
 にうき敷そはる かなしさを伊香保の沼の いかさまにいひしもや
 らば 水のあわと消えにし人をわすられぬべき
 あるよにもありのすさびはおもはえぬ人に別れむ物とやはみし
 ありてだに程をしふればこひしきを又見るべくもなきぞ悲しき
 君まさぬきげきを誰にかたましうきもつらきも共にとひしを

文部

東曆うしの祭を賀茂の翁の家にてしたまふをり
 嶺の雲あがれる世の心詞をし、いさゝかもわきまへ知らざめるは、うつ
 せみの世におひ出でぬるかひやはある、花もみぢのもとにあそび、月雪

の宴あそびをりにふれつゝ、はかなきことのついでにも、いひ出でむこと
 のつたなかるべきは、人わらへにぞありなむ、いでや水鳥の賀茂の大人
 なむ、ちはやぶる神代の書よりはせめ、よろづのこの葉てふ書など、い
 そのかみふりぬる事せものかぎり、ときわきらめ給はずといふことな
 かりし、をりくち出で給ふ歌は、いにしへの人鷹赤人といふにも、を
 さく、劣るまじう、貫之躬恒あそぶの身をかへ給ふにもやと、あやしきま
 で予おぼえける、此賀茂川の清らなるあがれに年をる心うつしつゝ、
 み見るとはすれど、深き淵の底の心までは、えもはかりやらで、たゞ浅ら
 かなる顔をのみよとくもにたどりぬるこそ、はかなうくちをしきや、こ
 ろに大人のすべてのまなびつたへうけ給ひける、荷田のすくねよ、身ま
 かり給ひてより、今年はたとせあまり五とせになむなり、にたれば、いと
 いかめしうかうくしう、みたままつり奉れ給ふ、かゝれば誰も親の親
 としたふとびおもへば、人々も何くれとたむけ奉れ給ふ、千種の花の言
 の葉の、いとはひやかなるが、おほかなる中に、なるかやの色なくみだ

れたるが、さしまじりたらむは、いともつゝましゆれど、露ばかりだに、か
すまへたまはらむかしとてなむ、かの御魂はやううつせみとませしほ
ど、からのもやまどのも、まあびの道つくし給ひ、日の本にありとある書
ども見しあきらめ給ひ、ぐだれる世にすたれたる古言をしも、おこし給
ひけり、其道々をわかちつゝ、人々につたへ給ふが中に、在麿のぬしへは、
もはらおほやけのつかさくらゐのすぢをゆづり聞え給ひ、わが大人へ
は、ふることの學の道ををしへ殘させ給ひけり、在麿のぬしも、わがもど
にをりくはとひわたり給ひつゝ、何くれとまなびのゆゑよし人々に
かたりをしへ給ひし事もありしを、かたはらにさふらひて、さゝもしつ
れど、まだをさなきほどの事なれば、かたはしをだに、さゝ知る事もな
りき、いくほどもあらで、このぬしさへゆくりなくなき人の數に入り給
ひしかば、今はたいおのがをしへの君のみぞ、ひな鶴の手とせをかけて、
のこりどいまり給ひ、いやさかえにさかえ給ふを、宿禰のみたまも、さこ
そあまかけりつゝ、めでよろこび給ふらめ、今よりのちも、しづのをだま

きくりのへしつゝ、ふることは、よろづ代ふとも、うちはへてたゆること
なく、めぐみ給ひなむど、たのもしうなむ、

秋露にみちやまどはむかくばかりてらせる月のなからましかば
言の葉はむかしを今になしぬれど、すぎにし君はかへらざりけり
みさこゐる磯のしら浪たちかへりむかしの人をしのぶころかな

つくば子家集 終

